

拝宮農村舞台の復活

復活公演の意義

大和武生

昨年八月、阿波農村舞台の会の見学会で拝宮を訪れた。そのとき同行した青年座のメンバーが舞台で人形をまわしたことが、今回の復活公演の発端。その後、拝宮の有志が各地の農村舞台公演を見学し、部落内での協議も重ねて開催を決めた。部落総出で舞台の修復や公演準備に当たり、役場や警察署の全面的な協力も得て実現にこぎつけた。

青年座の三番叟と日高川で幕を開けた舞台は、川内北小学校人形浄瑠璃クラブの子供たちによる阿波鳴、新内節浄瑠璃の人間国宝・鶴賀若狭掾師匠の語りと盛りだくさんな内容であったが、雨の中、最後まで本当にたくさんの方が楽しんだ。拝宮和紙のふすま絵やタペストリーが舞台の背景を飾り、青年座の三番叟には地元の人たちが操る拝宮のえびすも加わった。雨に煙る山村の風景も含めて、拝宮という地域の豊かな文化が今回の公演を支えた。



本年六月六日、五十年ぶりに復活した拝宮農村舞台の公演は雨の中で行われた。遠くで鳴く鶯の音が山村の舞台の雰囲気をついに盛り上げていた。

新内節を初めて聞く人は義太夫節と異なる語り音楽の情緒にひきつけられ、老人たちは子どもの人形ぶりに見入った。また、「阿波鳴」だけが浄瑠璃と思っていた人は大蛇やガブ人形の登場に人形芝居の深さを知らされたようだ。いろんな見方を通して舞台と観客席が一つにとけあっていた。

また、復活公演のために奮闘した地元の人々は、舞台の演技には集中できなかつたようだが、大勢の人々が集まって、楽しんでくれたという主催者としてのより大きな喜びに満ちた。それとともにやれば出来るという強い自信を持ったに違いない。ともあれ、人間国宝を迎えて公演するという村の歴史にとっては画期的な出来事を見事になし遂げた。

現舞台の全身となる最初の舞台の建設時期は、正確には不明であるが、残されている棟札から寛政十年（一七九八）という可能性もある。そのころの拝宮村は、藩発行の地誌『阿波志』によると、五十世帯百二十三人で構成され、耕地面積十三町八反余（千三百八十八アール余）・石高五十八石の小村で、土地はすべて藩の直轄地であった。この小さな山村が、県下でも最大級の

舞台と五十数個の人形頭と二百五十点の衣装・道具を有する人形座を維持することは並大抵のことではなかっただろう。

まず、白人神社本殿より大きな定舞台を建設するためには、全ての村人の経済的、肉体的協力がなければならぬ。現存舞台の建築状況を見ると、太さの違う建材を不釣り合いに継ぎ足した工夫があらわに見られる。これは、使いふるした個人の建材を持ち寄ったことを意味するだろう。この状況から、村人が財力・労力・技術・知恵などをフルに活用し、自分たちのコミュニティセンターとしての舞台を建設したことが窺える。さらに、藩有林の木材を手に入れるために、藩との折衝や駆け引きも行っただろう。

しかし、苦勞の末に獲得した舞台を本来の目的で使うことなく放置し、人形頭や舞台道具を手放してしまったのは、農村の荒廃と経済優先の社会風潮の結果であった。

今回、農村舞台の復活公演の企画は単なる懐古趣味ではない。経済効率第一主義のために切り捨てられた自然と調和した昔の生活を考え直したいという願いがあった。

地元の人々とボランティアが協力して農村舞台の公演を復活させようとする今回の企画成功の影には、舞台建設時に匹敵するだけの努力とエネルギーが必要であった。しかし、その成功は自然と調和していた時期の人間の生活を振り返る契機を示してくれた。この火は消すことはできない。



農村舞台復活公演を終えて

上那賀町教育委員会
横山尚純・笠井得江

上那賀町拝宮 古田啓二

山深い谷間の里に三味線の音色や太夫の声が響きわたると、かつてこの地で拝宮座が芝居や人形浄瑠璃などを上演していた頃に思いをはせることができました。この復活公演に当たり、観客の送迎等の受け入れ体制や当日の天候等不安もありましたが、沢山の人の協力のおかげで、その不安も解消することができました。また、地元の人達は、境内の整備や下草刈り・襖絵の張替等公演に向けての準備に大変だったことと思いますが、井本会長さんをはじめ地域が一丸となって取り組んで頂き、半世紀ぶりの復活公演を無事終了することができました。

当日は、あいにくの雨となりましたが大勢の人達が訪れ、舞台と観客が一体となった素晴らしい公演となりました。公演終了後観客の方から「良いものを見て頂いてありがとう。」の言葉をいただき、本当にうれしく思うと同時に、このすばらしい文化を大切に守っていかなければと強く感じました。

この公演を実現してくれた地元拝宮農村舞台保存会の熱意に敬意を表するとともに、ご支援いただいた阿波農村舞台の会の皆さん、そしてご協力いただいた全体的に厚くお礼申し上げます。



公演日が決まり、佐藤さん、井本会長さん他地元保存会全員で半世紀前を思い出しながら、襖張りから始まり途中とまどいながらも作業が進んだ。六月六日の公演日は残念ながら雨であったが白人神社始まって以来の大勢のお客さんで盛大に公演が始まった。出演者の皆さんには大変遠い所来ていただき、美しい三味線の音、すばらしい声、又人形と人が一体となつての人形つかいに感動した。小学生による人形に鳴りきった演技かわいくぜひこれからも続けてもらいたい。さて、自分も初めてえびす人形をつかかせてもらったが以外に重くつかい方のむずかしさを実感したが、機会があればまわしてみたい。公演終了後「よかつたよ、次もたのむぞ」の言葉に拝宮農村舞台の保存と町活性化の為にがんばろうと思った。後になりましたが阿波農村舞台の会、町教育委員会、関係者の皆さんには大変お世話になりました。

六月六日、拝宮の農村舞台は五十年振りの活気に満ちていました。それじゃあその間活気に満ちた日は一度もなかったのかと問われれば、そうではないけれども、あの緊張感とある種の期待感が入り混じった独特の雰囲気は、やはり半世

轟 中村功

紀振りのことであつたらうと思います。大勢の人々が去つた後の拝宮は、またいつもの静かな山村に戻つたのですが、公演日以外の日でも、活気に満ちて生き生きとした村でありたいとつくづく思います。

